

野球指導者における指導理念の経年的推移に与える影響要因に関する研究

A study on factors which influence gradual changes in coaching philosophy of baseball leaders

1K08B082-5 齊藤 佑介

指導教員 主査 作野 誠一 准教授 副査 木村 和彦 教授

【緒言】

筆者は、高校時代に野球部主将・エースピッチャーとして、甲子園出場という大きな夢に向かって尽力していたが、結局は夢破れてしまった。しかし、チームの大黒柱的存在としてメンバーを牽引し、高校時代に充実した学生生活を送ることができたのは、最も尊敬する監督に出会えたことに尽きる。その監督がおっしゃっていた言葉に、「俺が若い頃は本当にスパルタだった。選手たちも必死になって練習に食らいついていたのを思い出すよ」というものがあった。この言葉を聞いた筆者が率直に感じたことは、指導者における指導理念は経年的に移り変わる可能性があるかもしれないということであった。

筆者は、高等学校の保健体育教員になることを目指しているが、それと同時に野球指導者の立場から、教え子を甲子園という舞台に立たせたいという遥かなる夢を抱いている。その夢を叶えるために、選手たちに対してどのような指導理念を持ってアプローチしていくことが大切なのかをしっかりと把握し、本研究に結びつけることが必要なのではないかと考えた。本研究の結果や考察を踏まえ、今後教員として、あるいは野球指導者として、筆者の指導理念の軸となれば良いと考えている。

【研究目的】

本研究では、小学校から高等学校までの選手の指導にあたる野球指導者を対象とし、指導理念の経年的推移の構造を明らかにするとともに、指導理念の経年的推移に与える影響要因について考察し、指導者のあるべき姿を模索していくことを目的とした。

【研究方法】

指導理念の経年的推移が起こる可能性がある小学生から高校生の指導経験がある野球指導者4名（スポーツ少年団指導員1名、中学校教員1名、高等学校教員1名、高等学校外部指導者1名）に対して面接調査を行った。質問項目は、計10項目を用意し、自由に口述する形式をとった。

指導理念の経年的推移を明らかにするため、20歳前半から30歳、30歳から40歳、40歳から50歳、50歳から60歳までの計4段階に区分し、指導理念に変化を与えたと考えられる影響要因を抽出した。指導者の内的要因と外的要因の両側面から考察し、内的要因と外的要因の因子分析を検討することで、影響要因をカテゴリー化して、指導者のあるべき姿を模索していった。

【結果と考察】

すべての面接者において、指導理念の経年的推移があったことがわかった。また、指導者によって指導理念の経年的推移の時間の幅に差異が生じたことがわかった。指導理念の経年的推移において、従来の指導理念とはまったく異なる新たな指導理念を構築する指導者と、従来の指導理念にある部分だけ立ち戻ってさらに新たな指導理念を付加させて構築する指導者の2つのパターンが存在したことが明らかとなった。

指導理念の経年的推移に与える指導者の内的要因と外的要因（計33項目）について因子分析を検討し、全部で10個の因子が抽出された。因子分析の結果による影響要因のカテゴリー化により、指導者における指導理念の経年的推移に与える影響要因は外的要因の影響を受けやすいが、その影響要因の範囲はやや限定的であった。その一方で、指導者における指導理念の経年的推移に与える影響要因は内的要因の影響を受けにくい、その影響要因の範囲はやや広いことがわかった。

以上のことを踏まえると、指導者はある程度予想される外的要因に対しての改善策を自ら提示し、従来の指導理念にある部分だけ立ち戻ってからさらに新たな指導理念を付加させて構築していた可能性があったことが推測できる。その一方で、指導者は予想すらない内的要因に対しての改善策をあまり見つけられないまま、従来の指導理念とはまったく異なる新たな指導理念を構築せざるをえなかった可能性があったとも推測できる。